

神様と師匠

龍の花嫁 7

EntsCat

<https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18429060>

R-18, モ腐サイコ100, モブ霊, もぶ神様×霊幻, 女装(白無垢), もぶおばさん×霊幻, 道具使用, 緊縛

神様vs相談所 7 話目です。エネマ威力発揮と緊縛と初夜です。好きな方はお楽しみください

Table of Contents

- [龍の花嫁 7](#)

龍の花嫁 7

タイムリミットまで、あと、2日。

「おい、どこに行くんだよ、芹沢」
朝早く。

今日も神社について調べよう、と落ちあった芹沢とエクボは、やるではない方向に足を向けていた。

「図書館だよ。もはや時間が無い。最終手段の準備をしないと」
「最終手段？」

「エクボが言ったんじゃないか。力づくで神様から取り戻すこともできる、って。……だから、龍の弱点を調べる」

「……神殺しをしようってのか……！？やめとけ、世界にどんな影響が出るか分かんねえぞ！」

「そこまで大それたことは考えてないよ。神様がひるんだ隙に靈幻さんをこちら側に引き寄せる、ぐらいのことだ。そもそも……いや、いいや。余計なことだった」

「それならいいが……図書館に行くまでもねえんじゃないか？日本で龍退治と言え、ヤマタノオロチだろ」

「ゲームで見たことある」

「……なるほど、今の若いやつだとそんな程度の認識か。確かに一回ちゃんと調べた方がいいな」

そうこうしているうちに、図書館に着いた。

「ヤマタノオロチ……あれ、絵本だ」

検索用のパソコンに打ち込んで、芹沢は不思議そうな顔をする。

「また古書が出てくるかと思ってた」

「バッカやろう、有名な話なんだよ、ヤマタノオロチ退治は！それこそ絵本になるくらい」

とりあえず場所のメモを取り、芹沢は書架に向かう。

「これか。ええと……」

空いてるテーブルを見つけ、芹沢は絵本を読み始めた。

しばらくして、本を閉じる。

「なるほどなあ、龍の弱点となりそうなのは……」

※※※※※※

疲れた、と靈幻は伸びをする。

エネマグラを挿れたままの接客は、違和感こそ無くとも、それこそ違和感が無いくらいだから、すっぽ抜けて落ちないかとヒヤヒヤする。

それなのに呪術クラッシュの案件が続き、立ちっぱなしで冷や汗をかいていた。

（やっぱり固定バンド買った方が良かったかもな）

とまあ。靈幻は完全に油断していた。

—自分が挿入されているのは性具だということを、すっかり忘れていた。

がちゃ。

「師匠お疲れ様です。そろそろ休憩だと思って、たこ焼き買ってきましたよ」

ここ数日、茂夫は部活を休んでまっすぐ相談所に来ている。

なんだか悪いな、と危機感無く、茂夫達にバレたら怒られることを思いながら、靈幻は頬をかいた。

そして、何気なく、茂夫の向かいのソファーに、座った。

「~~~~~っ!？」

腰が、砕けたかと、靈幻は思った。

座った瞬間にソファーがエネマグラを押し込み、それが突然強烈な性感を靈幻にもたらしたのである。

これまではアナルの拡張のみを受け入れていた靈幻の身体がエネマグラに慣れ、前立腺の開発が、はじまった。

が、その絶大な威力に、靈幻だけでなく茂夫も呆気にとられて固まってしまう。

紅潮した頬、震えるくちびる、切なげに寄せられた、まゆ。
目の前で突然靈幻が発情したようにしか見えなかったが、エネマグラのことを思い出して茂夫は慌てて営業中のフダを準備中に超能力で裏返した。

「も、ぶ……」

太ももまでじんじんと痺れ、腹の奥のわだかまりが一瞬で何度も全身まで広がる。

深いドライオーガズムに、靈幻は息も絶え絶えになってしまった。妙に身体が切ない。茂夫に抱きしめて欲しい、と思わず手を伸ばす。

「~~~~~っあ、」

だがみじろぎするだけでまたメスイキする。

過ぎた快感が、靈幻の思考を追い詰めていた。

「もぶ、どうしょ、イクの、止まんない……」

「——！」

とりあえず弟子に助けを求めてしまった靈幻を襲いたくなかったのを、茂夫はすんでのところで踏みとどまった。ゴムもない、ローションも無い所で靈幻に無体を働かなかった自分を自分でめっちゃ褒めておいた。

「師匠、エネマグラ抜きましょう。抜いてあげるんで、施術室行きますよ」

立ち上がって歩き出そうとした靈幻のひざが、ガクンと折れて倒れそうになる。絶頂の余韻が抜ける前に次のドライオーガズムがきていて、もはや靈幻には逃げ道が無かった。

「あぶない！」

とっさに超能力で受け止める茂夫。

今の状態の靈幻にうかつに触らない方がいい、という勘が働いての判断だった。

それは正解だった。ドライオーガズムの余韻で全身が敏感になっていた靈幻は、茂夫に触れられなかったことにほっとした。今、どこかに触れられたら、もう一回メスイキする。それほどまでにエネマグラが靈幻を責めさいなましていた。

そのまま注意深く茂夫は靈幻を施術室のベッドにのせる。

エネマグラを抜きやすいよう、取り扱い説明書にあった横向きの体勢を霊幻に取らせる。

「ズボン、脱がせますよ」

「うん……っ」

返事まで甘やかな声になっていて、茂夫はくらくらした。

ほんとうに、客や芹沢がいない時でよかった、と茂夫は思う。こんな霊幻の姿を他の人に見せたく無かった。

ズボンをずらし、下着をずらす。

「あ……っ、あ、ああ……っ！」

口を手で押さえた霊幻がピクピクとその度に反応するのが、本当に茂夫の目の毒だった。

「……抜きます」

心をもたないで茂夫はエネマグラの取っ手とゴムのハシをつかむ。

ゆっくりと抜き出していく。

「~~~~~っ」

エネマグラの突起が後口から抜けていくたび、ビクビクと霊幻の腰が震える。

メスイキしてるんだ……とうっかり考えてしまって、茂夫は前かがみになった。

にゅぽん、とエネマグラが全部抜ける。

はぁっ、と悩ましいため息を霊幻が漏らした。

「びっくりしたわ……ヤバいな、エネマグラ」

「……ですね」

「すげえダルい……悪いけど、少し寝るわ……」

メスイキはとても疲れる。強制的に何度も昇り詰めさせられた霊幻は、ダルさと眠気に勝てず、すうすうとすぐ眠りについた。

「……」

前かがみのまま下着とズボンを甲斐甲斐しく上げる弟子をおいて。

※※※※※

しまった、と思いながら霊幻は目覚めた。

まだ身体がダルい。でもほったらかしにしてしまった弟子の様子を

真っ先に確認したくてドアを開けた。

「わるい、モブ……っ」

やりたかっただろ、と謝る霊幻に、目を丸くする茂夫。

「何言ってるんですか、あの状態の師匠じゃムリですって」

「……っそうだよな、あんなはしたなく何度もオモチャでイッて、萎えるよな……」

「いやそれはめちゃくちゃ良かったですけどって言うかワザとやっています！？タツんでやめてください！！」

もうやしろに行く時間ですよ、と必死に意識を逸らした茂夫に言われて霊幻ははっとする。

かなりの時間、寝てしまったのだ。

「予定どおり、今日の儀式が終わってからアンタを抱きます。ホントは今もエネマグラを挿れておいてもらうハズでしたけど、もう、要らないですよ」

「お、おう」

これ以上挿れてろと言われたら鬼としか思えない。霊幻はエネマグラを挿れたらもう歩ける気がしなかった。

今晚、儀式が終わってから。

霊幻は期待と不安でぐくりと喉を鳴らした。

※

やしろに着くと、いつもの老婆の他に見慣れぬ黒留袖のオバさんが2人、霊幻を待ち構えていた。

「本日は縄化粧をさせていただきます。縄師の山（やま）と申します」

「同じく縄師の岩（いわ）と申します」

2人のオバさんは深々と霊幻に座礼する。

戸惑ったままの霊幻はいつものように風呂に入れられ白無垢を着せられ、やしろに連れて行かれたが、布団では無くゴザの上に正座させられた。

縄師の1人が霊幻の胸をはだけさせ、ぱっと裾を開いて白い脚を露出させた。

「えっ、何するんですか！」

霊幻がさすがに戸惑って縄師に声をかける。

「今から縛らせてもらいます。大丈夫、手練れの2人です。痛くはないハズですよ」

しゅる、と青緑色の変った編み方をされた縄が霊幻の鎖骨の下に巻きつかされる。

肺に圧迫感。

が、その縄が胸筋の下に通されると、少し緩んでここちよい締め付けに変わった。

「は、あ……」

思わず出たため息が思ったより熱っぽくて霊幻は困惑する。

しゅる、しゅると縄が肌を滑るたびに。

確実に重い熱が、腹の奥に溜まってきていた。

いつのまにか両腕は後ろで固定され、上半身はみじろぎしか出来なくなっている。

「あまり動かせないでくださいませ。お肌が傷付きます」

つ、と背骨の上に捻り合わされた縄を指でなぞられて。

「あ、あぁっ」

思わず霊幻は切羽詰まった声を上げてしまった。

縄は、上半身に蛇のように絡みついている。

繋がった何処かが、霊幻の性感帯をかすめたのだ。

「まだ半分でございますよ」

そんな霊幻に気が付いているだろうに、あくまで職人としてこの場にいる縄師は淡々としている。

次は縄師は霊幻の左足に縄をかけていく。

「……っ、うん……、」

皮膚の薄いところを触られ、霊幻は頬を染めるが、縄師達は冷静で、1人で昂らされているようで辛くなってくる。

が。

「あっ！」

ぐっ、と折り畳まれた脚の縄を引かれて。

びくん、と霊幻はのけぞってしまった。

その瞬間、ふわふわと頭が気持ち良くなってくる。

霊幻はこちよく縄酔いしていた。

「あ……う……？」

そこにあるのは束縛感ではない。

抱きしめられているかのような、安心感。

「吊ります。少し衝撃がありますよ」

背中と足の縄が滑車にかけられ、ぐいっと霊幻は宙に吊られた。

「〜〜っあ！」

軽い絶頂。

たら、と霊幻の脚の間を白濁が流れていく。

壮絶なその光景をずっと見ていた茂夫は、しばらく動けないな、と真っ赤な顔で前かがみになっていた。

「……お疲れ様です」

垂れたものをさりげなく懐紙でふいてから、縄師が終了を告げる。

霊幻を下ろして縄を外しはじめた。

しゅるしゅると解かれていく縄にほっと息をついたが、その下から現れた跡に霊幻はもう一度赤面した。

霊幻の胸と左足には、くっきりと龍の鱗のような赤い縄の痕がついていた。

縄化粧だ。

これだけしっかり痕が付いてしまっては、銭湯はおろか、しばらく肌を出す服すら着れないだろう。

「花嫁様は色が白うございますので、美しい縄化粧になりましたね」

うっとりとした顔を隠せない縄師が服をなおそうとした先手を打って、霊幻が自分で襟と裾をなおす。

ただひたすらに気恥ずかしかった。

「……これは形式だけ残ったものですが、言い伝えでは昔の花嫁は縛られたまま川に沈んだとされています」

「はっ、緊縛趣味まであるのかよ。とんでもない変態だな、神様も、アンタらも」

「……それでは花嫁様、今夜も、あちらへ」

少しため息をついて、霊幻はいつもの布団に向かう。

横たわるとほぼ同時に、意識がなくなった。

※※※※※※

いつもの日本家屋に、しゃんと立ったまま。
指一本動かさないことに、俺は舌打ちしたい気分だった。
なるほど。縄で縛るのはこういう効果があるのか。

「やあ、今日は綺麗な痕をつけてきたね、霊幻」
くすくす笑いながら神様が現れる。

「やめっ……」
襟を開いて痕を確認しようとする龍神に、抵抗できなかった。
縄化粧に、龍神が目を細める。

「全身に龍が巻き付いた感想はどうだい？」
なるほど。あの縄は、そういう。

動けないわけだ。
「今日は大事な儀式だ。神々も固唾を呑んで見守ってる。早く済ませてしまおう」
床の上に、婚姻届が置かれている。

ざあっと血の気が引いた。
「さあ、『霊幻』、早く『書くんた』」
「いや、いやだ……」

言葉とは裏腹に、俺は婚姻届の前に膝をつき、筆を手取る。
「こんな、無理矢理、やめてくれよ、モブ」
ピクリと×××が眉を上げる。何か気に入らなかったようだ。

「いいから、ほら、はやく」
震える手で、霊幻、と書き。

それから、新隆、と――

※※※※※※

「師匠が目を覚まさない……！」
茂夫は焦ってぎゅっと霊幻の手を暖めるように握りしめる。

その間にも霊幻の手はどんどん冷たくなっていく。

「あっちで何かあったんだ。ヤバいぞシゲオ、なんとか霊幻の神気を払え！」

霊幻の手を両手で握りしめ、髪を揺らめかせて茂夫は力を霊幻の中に流し込む。

「……っ、それでダメなら……！」

「起きた！」

うっすらと霊幻の目が開く。

が、焦点が合っていない。

声も発さない。

「やしろから運び出せ！」

やしろから引きずり出した霊幻を、地面に寝かせる。

「師匠、師匠！」

「おいコイツ息してねえぞ！」

そうエクボに言われた茂夫は、自分の呼気にチカラを込めて、ふうっと霊幻に口付けて吹き込んだ。

「……っかは！」

霊幻が咳き込んで意識を取り戻す。

「モブ……エクボ……俺……名前を、神様に知られた……」

「それでか、戻ってこられなかったのは……」

「すまねえ……」

「師匠が謝ることじゃないよ」

まだどこか朦朧としている霊幻にエクボは危機感を持つ。

「こいつはいよいよヤバいぞ、シゲオ。今日はちゃんとこいつの処女散らしてこいよ」

それを聞いて、茂夫も霊幻も赤くなる。

「どうして……まだ1日あるはずなのに」

ただ、霊幻の状態に老婆は真っ青になっていた。

※※※※※※

大きなベッド、ガラス張りのシャワールーム、ほの明るい照明。
俺はモブと、隣町のラブなホテルに来ていた。
絶対に声が我慢できない。そんな自信があったからだ。
俺とモブは無言でささっとシャワーを浴びて、急いでベッドに飛び込んだ。
ゆっくりしたいが、時間がない。できれば夜中までに、3回は.....
中出ししておきたい。それぐらいしておくとエクボが言ったからだ。

「.....師匠、指、挿れますね」
頷いて、緊張する。念のため酔い止めも飲んだ。エネマグラで拡張と開発もした。今度は吐かないハズだ。
そろ、とおずおずとモブが指を一本入れた。

「あ.....」
余裕。
余裕じゃねーかはははははは！

「大丈夫そうですね？」
「おー、エネマグラ様様だな」
そう言うとモブがむっとする。

「ほんとは僕がじっくり開発したかったのに」
そんな顔するなよ.....。俺はモブがすねた顔を見ると、なんでもしてやりたくなってしまう。

「他にもあるからいいじゃねーか」
「他って？」
「乳首とか.....」
「師匠の乳首開発していいんですか！？」

.....なんだろう、墓穴を掘った気がする。
喋りながら指を2本に増やしている。
意外と器用だな.....っ！？

「アっ！モブ、そこ、前立腺、んうっ、だからぁっ！！」
「え？これですか？」

コリコリ。ふっくら膨らんだソコを指先でこねられる。

「やっ、ダメだって、イっ.....！」
頭まで快感が走って、ずうん、と腰が重くなる。

「……メスイキしたら、しんどくなるから……」
ぼて、とベッドに身体を放り出した俺を見て慌ててモブはソコへの刺激をやめる。

「ししょう、中がぎゅーって、指を絞ってきます」
「イってんだよバカ。……いいからもう、3本挿れろって」
また慌ててモブが指を増やす。

ああもう。
可愛いなあ、ちくしょう。

「こうですか」
前立腺を避けて、ぐちゅぐちゅとモブが指を出し入れする。

「ん……いいよ……」
ぐぐ、っと。

足の裏を、モブの性器が押し上げた。

「……こーふんしたの……？」
なんだか可愛くて足先でちょちょくすぐってやったら、すいっとモブが身体をずらして逃げ出した。

「ちょっと、これ以上性癖増やさないでくださいよ」
胸の縄化粧を触りながら、コレだけでもそうとうなヘキなのに、とぶつぶつ言っている。

「……柔らかくなってきた。師匠……挿れますね」

ああ、とうとうか。

いや、やっと、か？

「モブ、おいで」
両手を広げて受け入れる。

ああ、きっと、俺は馬鹿みたいに幸せそうな顔してんだろなあ。
恥ずかしい。

「ししょう……」
感無量、って、こんな、モブみたいな感じに。
ずぬ。亀頭が肉輪を押し広げて、割りいってくる。
キツ……でも、我慢しないとな！

「は、あっ……」
ずる、ずぶ。じわじわとモブが入ってくる。
……なんだろ、この喪失感。男としての何かが壊れていく感覚。

あー、これが処女喪失、ってやつか。

自分の中に他人を受け入れるってのは、なんか、アイデンティティ崩れんなあ……。

でも。

「ししょう、ぼく、」

モブが、泣いていて。

「ぼく、幸せです」

何もかも、どうでも良くなった。

「ごめんなさい、ししょう、いま、ぼくは、ししょうを犯罪者にしたのに」

「いいよ、そんなの」

じわ、じわ。侵入は止まらない。

「それなのに、幸せで、幸せで、幸せで」

「男の本能じゃん、そんなの」

泣くなよ、なあ。おまえに泣かれると、俺……。

「本能で、男には勃ちません」

何もかも、あげたくなる。

「師匠だから、霊幻師匠だから、霊幻新隆だから。僕はこんなに興奮するし、幸せにもなるんです」

「そーかよ……」

全部、はいった。

きっ……っ……！

「気にすんなよ。全部やるよ。お前が欲しいなら、なんでもやらせてやる」

動かないでいてくれるのが正直助かる。ぜひぜひ、呼吸が上がる。

はは、情けねえ。

「だからさ、おまえが20才ぐらいになったら、ちゃんとお別れしような」

ぞわ、と。

全身に怖気がたつ。

ああ。

捕食者を怒らせた。

「ああ——ほんとに、アンタは——」

「ひっ！？」
ぐり。
会陰を指で押し上げられて、外から前立腺がつぶされる。
「分かってない！」
ず、ぶん。
まだ、奥が、あった。
「ああああああ！」
もぶ、それ、どこに、いれて、
「僕の、恐怖を、狂気を、見せて、やりたい」
暴れる、脚を、モブが、とらえて。
ぐっ、ぐっ、ぐっ、とぐぽぐぽ言う俺の奥を犯す。
「ああ……っ！」
ぴゅく、と俺の性器が精を吐いた。
乱暴な、モブも、可愛いよ……♡
「師匠、お願いだからどこにも行かないで」
「行かないさ」
「命が惜しいなら、家族が惜しいなら、この世界が惜しいなら」
「ぶっそうだな」
「僕の側にいて」
「……お前が望むなら」
別れたって、側にいてやるさ。
ドクドクと腹の中のモブが鼓動して。
じわ、と暖かくなる腹を、俺は愛おしそうに撫でた。
「……ししょう」
泣きながらぎゅっと抱きついてくるモブをよしよしと俺は撫でてやる。
「イってないですよね？」
……甘イキならしましたが？
「モブちょっときゅうけ」
逃げかけた俺の腰をぐっと掴んで、ゴリゴリと前立腺を性器でえぐりはじめたモブのお陰で、俺はイき狂う羽目になったのだった……。

続